うつぼ物語より（五）

関根慶子

一、仲忠、母に琴を習ふ

かくてこの子七になりぬ。かの祖父が弾きし七人の師の手、さながら弾きとり果てつれば、夜昼と弾き合せて、春はおもしろき草の花、夏はきよく涼しき蔭に眺めて、花紅葉の下に心をすましつゝ、「わが世の限は命あらむに従はん」と思ふ。琴は残る手なく習ひとりつ。この手変化の者なれば、琴の手母にもまさり、母は父の手にもまさりて、ものゝつぎつぎはおとりこそすれ、この族は、伝はるごとにまさることかぎりなし。かくてこの子十二は成りぬ。かたちのうるはしくうつくしげなること、さらにこの世のものに似ず。綾錦を着て、玉の台にかしづかるゝ国王の女御・后・天女・天人よりも、かゝる草木の根をくひ物にして、いは木の皮を着物にし、けだものを友として、木の空洞をすみかとして生ひ出でたれど、目もあやなる光添ひてなむ有ける。母も、父君添ひていつきかしづきし時よりも、容貌はまさりてめでたき事かぎりなし。この年頃、たゞこの猿どもに養はれて、こよなくたよりを得たる心地するもあはれなり。水は蓮の葉の大きなるに包みて持て来。芋、野老、果物は、さまゞくなる物の葉に包みて持て来集まる。

〔**口訳**〕こうして、仲忠は七才になった。あの祖父である俊蔭が弾いた七人の師の弾法も、母から教えられて、そのまますっ

かり弾きとってしまったので、夜、昼、母はこの子と合奏しては、春は美しい草花の許で、また夏は青葉の茂った清らかな涼しい木蔭で思いに耽り、花・紅葉の下に心を澄ませて、「私の生きている間は、その生命のあるままにまかせて、このようにして過して行こう」と思う。仲忠は、残る手なくすっかり琴の手を習いとった。仲忠は、暗通の人ではなくて変化の者なので、琴の手は、母よりもすぐれているが、その母もまた父の俊蔭よりもすぐれているのであって、物の伝えというものは、普通は伝わるにつれて劣っていくものであるのに、この俊蔭の一族では、逆に伝えられていくにつれて、どんどんまさっていくのである。このようにして、仲忠は十二才になった。その容貌の端正な美しさは、まったくこの世離れしている。このような草木の根ばかりを食物とし、木の皮で作った粗末な着物をつけ、他に人もなくただ獣ばかりを友とし、木の空洞を住む家として今まで成長してきたのであるが、綾・錦のぜい沢な着物をつけ、立派な御殿で大勢の人々にかしづかれている国王の女御、后、あるいは天女、天人などよりも、仲忠の容貌はすぐれていて、まったく驚くような美しさである。母も、父の俊蔭が側にいて大事に育てていた時よりも、今の方が容貌の美しさもまさって、この上もなく立派である。この年頃、ずっとこの猿たちだけに養われて、非常に頼りを得たような気持がするにつけても感慨無量である。水は蓮の大きな葉に包んで持って来てくれる。芋、野老、果物は、いろいろの木の葉に包んで、あちこちから持って来てくれる。

二、琴の霊力（一）

かゝるほどに、東国より都に敵ある人、報せむと思ひて、四五百人の兵にて、人離れたる所をもとむるに、この山を見占めて、おそろしげにいかきものども一山にみちて、目に見ゆる鳥、獣のいろをもきらはず殺し食へば、鳥、獣だに山を離れて逃げ隠るゝに、隠所もなき木の空洞に親子こもりて、草木をも食ふべき便なく、天地をもながめ見るべくもあらず、いみじき時に、年頃養ひつる猿、なほこの人をあはれと思ひて、武士の寝しづまるをうかゞひて、青つゞらを大なる籠に組みて、いかめしき栗、橡を入れて、蓮の葉にひやゝかなる水を包みて来るに、木のもとごとに臥せる武士ども、猿の渡るとも知らで、木の葉のそよぐに驚きて、「こゝに山のものゝ音す」とて、そこらの人火をともしてのゝしるに、せむ方なし。母の思ふやう、「わが親は、この二つの琴をば、幸にも禍にもきはめていみじからむ時かきならせとこそ宣ひしか。我、今よりまさりていみじき目をいつか見む。さはいへど、かくばかりにやありつるのこれこそかぎりなめれ」と思ひて、この南風の琴を取り出でゝ一声か

きならすに、父ぬしが七人の人のしらべてし声にいさゝかかはらず。一声かきならすに、大きなる山の木こぞりて倒れ、山さかさまにくづる。たちかこめりし武士、崩るゝ山にうづもれて、おほくの人死ぬれば、山さながらしづまりぬ。なほ、あくる午の時ばかりまで、遺言の手を折りかへしひきぬ。

〔口訳〕このようにして過しているうちに、東国から、京都に敵を持っている人が、その敵に復讐しようと思って上京して来て、四五百人の同勢で人里離れた場所を求めて、この仲忠母子の住んでいる北山を占領した。そして、見るからに恐ろしい感じの猛々しい武士たちが、一山に満ち満ちて、目に見える鳥や獣すべて種類をかまわずどんどん殺しては食べるので、おそれて鳥や獣たちでさへもこの山を去って安全な所へ逃げ隠れてしまったのに、この仲忠母子は、どこへも逃げられず、隠れ場所もないこの木の空洞にじっと籠っていたが、外へ出られず猿たちも近所にいなくなったので、草の根や木の実を食べようにも食べる方法がなく、外を少しでも眺めて状勢をうかがいたくてもまったく眺めやることも出来ずに、大層困ってしまった時に、長い間、仲忠母子を養ってくれた猿が、なおこの仲忠を気の毒に思って、武士たちがすっかり寝静まるのを待って、青葛を大きな籠にあみ、その中に立派な栗や橡を入れて、蓮の葉に冷たい水を包んで、仲忠母子の所へ運んで来てくれたが、木の下ごとに寝ていた兵士たちがその木の葉のそよぎに驚いて、猿が通って行くのだとも知らないで、「ここに何か音がする。」と言って、たくさんの兵士たちが火をつけて騒ぎ始めたので、どうしようもない。その時、仲忠の母が思うには、「親の俊蔭が、この二つの琴は、幸、不幸のどちらにしろ、そのもっとも極まった時に弾きなさいとおっしゃったものだ。ところで、今以上の恐ろしい目にまた遭うだろうか。これまでも、今のような危険に遭遇しただろうか。何といっても今がもっとも危険な時にちがいない」と考えて、父の俊蔭が、ひどい不幸に陥入った時に弾けと言った南風という琴を取り出して、一声弾いてみると、父俊蔭が七つの山のあるじたちの奏法を弾いたその音に全く違わず、すばらしい響であった。そして、一声弾いた時に、大きな山の木がすっかり倒れて、山が、さかさまに崩れてしまった。今まで包囲していた兵士たちは、崩れた山の下に埋れてしまって、たくさんの人々が死んだので、またたくまに山はもとの静寂に戻ってしまった。仲忠の母は、なお翌日のお昼頃まで、引き続き父の遺言の手を繰返し繰返し弾いていた。

三、琴の霊力　(二)—仲忠、父と邂逅—

その日、帝、北野の御幸し給ふ日にて、その山のあたりなど御覧ずるに、その日さぶらひ給ふ右大将の大臣、御馬を引き廻して、この琴の調を聞きつけ給ひて、御兄の右の大臣にきこえ給ふ。この北山にかぎりなくひゞきのぼるものゝ音なむきこゆる。琴の声ときこゆれど、おほくのものゝ音あはせたるやうにて、内にさぶらふせた風の一つ族なるべし。いざ給へ。近くて聞かん。」と宣ふ。右の大臣、「かくはるかなる山に誰かものゝ音しらべて遊び居たらむ。天狗のするにこそあらめ、なおはせそ」ときこえ給へば、大将、「仙人などもかくこそすなれ。さらば兼雅一人まからんかし」と宣へば、「例のすさびありきなめりかし。さらば早う」とて、御馬添ひばかりにて入り給ふに、武士の残れるは、公の御使の捕へに来ると思ひて、谷に落入り、異山に逃げ隠れて一人もなくなりぬ。

二所続きて入り給ふに、いみじきものゝ音のひゞきまさりつゝきこゆ。空にもつかず地にもつかずきこゆる時に、あやしく聞きわづらひて、なほ山のすゑをさして入り給ふ。むかひたる峯すぐれて高し。その峯のそらにきこゆ。いかめしう茂りて、森のごと見ゆる中に、この琴の声きこゆ。かの峯をさして入り給ふに、空につける山に、獣は衾を敷きたらんやうにある時に、兄の大臣きこえ給ふ。「さればこそきこえつれ。むくつけくもあるかな。なほかへりなむ。いざ給へ」と宣へば、「若きことをも宣はするかな。これこそ面白けれ。深き山に獣すまずば、なにか山と言はん。檀特山にいるとも、兼雅ら獣に施すべき身かは。この獣、害の心なすや見給へ」とて、御馬をば尻打ち入り給へば、跳びに跳ぶ。御馬にもとより乗り給ひつれば、雲につきて馳けるやうにて入り給ふに、御馬添ひも更に参らず、その麓にとまりぬ。兄の大臣は、御馬も劣りて、え追ひつき給はず、とまり給ひぬべけれど、昔父母の加茂詣の時、騒ぎ宣ひしをおぼし出でて、「亡き御かげにも、さる獣の中に一人入れて留まりぬるとは見え奉らじ」とはげみ給へど、彼は大将におはすれば、胡籙負ひたれば、獣もさりきこゆ。この大臣はさもおはせねば、いと恐しうて、なほえのぼり給はず。大将はいみじき峯を五つ越えておはするに、獣はなほ貝を伏せたらんやうに同じうへにたちこみたるに、分け入りてこの琴の音を尋ねて、空洞のある杉の木のもとに打寄りて、馬より下りて見廻り給ふ。

この木の前には、よろづの木なつかしう、苔を敷き沙をまきて、きよげなるかげに立ち寄りてこわづくり給へば、この空洞の人は琴を弾き止みてあやしがりて見給へば、いと清げなる人立てり。子の言ふやう「いとめづらしくあやしきわざかな。物の音をきゝて天人の下り給へるにやあらむ」と言へば、なほ問はまほしくて、苔の簾の中ながら、「彼は何の人のおはしますにかあらん。熊、狼を友達にて、世の中の人もまうで来通はぬ山ぶところに、いかで入らせ給へるならん。」客人、さればこそ人

ありけれとおぼして、「かく人住み給ふと聞きて、真、そらごと見給へにまうできつるなり。答、「この年頃、この山にこもり侍れども、かうたづねとはせ給ふ人もなきに、何事によりてかたづねおはしましつらん」ときこえて、苔の上に出でたり。

〔口訳〕北山で大騒動のあったその日は、天皇が北野へ行幸なさる日で、仲忠母子の住む北山のあたりをごらんになったが、お伴についていらっしゃった右大将（仲忠の父兼雅）は、馬に乗って歩き廻られるうちに、仲忠の母が弾いている琴の音を耳になさって、御兄の右大臣に、「この北山で、この上もなく響きわたる楽の音が聞えます。琴の音ですが、まるで多くの楽器を合奏しているかのように賑わしく響いて、普通の琴の響ではありません。きっと宮中にある〝せた風〟の同類の琴でしょう。さあ、行ってみましょう。もっと近くで聞きましょう」とおっしゃる。右大臣は「こんな人里離れた深山で、誰がまあ琴なんか弾いて楽しんでいましょうか。きっと天狗らが弾いているのでしょうから、いらっしゃってはいけません」とおっしゃると、大将は、「天狗などという恐ろしいものではなくて、仙人なんかもこのような深山で楽を楽しむということです。仙人かもしれませんから、それなら、私ひとりでまいりましょう。」とおっしゃると、右大臣は、「また、いつもの気まぐれな散歩なのでしょう。それならば、いっしょに、さあ行きましょう。」とおっしゃって、御馬添いばかりを御伴に連れて山へ入って行かれると、東国から上って来た武士たちで生命拾いをした者たちがまだ残っていたが、彼らは、朝廷から追討軍が遣わされて、今、自分たちを捕えに来たのだと思って、あわてて谷へ落ちこんでしまったり、ほかの山へ逃げて行ってしまったりして、ひとりもいなくなった。

大将と右大臣と、お二人が続いて山へ入って行かれると、あのすばらしい楽の音がだんだんと音高く聞えて来る。しかし、その楽の音は、空から響いて来るのでもなく、また、地上から聞えてくるようでもないので、いったい、どこから聞えてくるのかすっかり困ってしまって、なお、山の奥をさしてお入りになる。正面に当って見える峯が、特に高くそびえているが、その峯の空に、この楽の音が聞える。大層樹木が茂っていて、森のように見えるその中から、この琴の音が聞える。そこで、お二人は、この峯を目ざして入って行かれたが、非常に高い山で、しかも獣が衾を敷きつめたようにおびただしく住んでいるので、右大臣は恐れをなして大将に言われた。「だから申上げたのです。まあ、たいへん恐ろしいことですよ。やはり帰りましょう。さあ。」とおっしゃると、大将は、「ずいぶん若々しいことをおっしゃるのですね。こんなようすの山こそ、面白いものです。深山に獣がいなければ、それは山とは言えませんよ。檀特山に入ろうとも、この身は獣などに食われるような身でしょうか。この獣たちが、私に危害を加えるものかどうかごらん下さい。」とおっしゃって、馬に鞭をあててこの山へ入って行かれる

と、馬はどんどん跳ぶようにして進んで行く。大将は、良い馬に乗っておられたので、まるで宙を飛ぶようにして馳け入ってしまわれたが、御馬添いは、まったくついて行くことが出来ず、その麓に留った。兄の右大臣は、馬も弟のものよりは劣っているので、弟に追いつくこともお出来にならず、このまま行くのをよそうかと思われたが、昔、加茂詣の時に、弟が一夜どこにいるのかわからなかった時、父母が非常に騒いで弟の身を案じ、自分をひどく叱責されたことを思い出して「亡くなられた父母にも、弟ひとりをこんな恐ろしい獣の中に入れておいて、自分だけは後に残ったなどと思われたくない。」と自身を励まして、一生懸命に弟の後を追おうとされるけれども、弟は大将で、武装していられるので、獣たちも恐れて道をお開けするが、この兄の右大臣は、別に武装もしていらっしゃらないから、獣たちがたいへん恐しく思われて、やはりどうしてもこの峯にお登りになれない。一方、大将は険しい峯を五つも越えて、どんどん進んで行かれるが、獣はやはり貝を伏せたように積み重なってそこここにいる中をわけ入って、この琴の音をたずねながら、とうとう仲忠母子の住んでいる空洞のある杉の木の所までやって来て、そこで馬から下り、あたりをごらんになった。

この杉の木の前には、他の場所と違って、すべての木々の姿も優雅で、その下には苔をしきつめ、また砂がまき散らしてあって、人里めいた感じである。大将は、そのきれいな木陰に立ちよって、案内を乞うたので、この空洞の中の人は琴を弾くのを止めて、ふしぎに思って外をごらんになると、大層美しい人が立っている。そこで、子の仲忠が、母に、「大層珍しく、ふしぎなことですね。琴の音を聞いて、天人が下っていらっしゃったのでしょうか。」と言うと、母は、なおそれが、誰か聞きたくて、苔の簾の中から、「いったい、どなた様でいらっしゃるのでしょうか。熊や狼ばかりを友だちにして、世の人々もまったく訪れてこないこんな山奥に、どうして入ってこられたのだろうか。」と言われた。それを聞いて、大将は、やはりこんな山奥でも人が住んでいたのだと思われて、「このような所にも人が住んでいらっしゃると聞いて、本当かどうか確かめに来たのですよ。」とおっしゃる。仲忠は、それに答えて、「この何年間かずっとこの山にばかりこもって住んでいましたが、このように訪ねていらっしゃる方もありませんのに、どうしたわけであなたはここまで訪ねていらっしゃったのですか。」と言って、苔の上に出て来た。(註)

(註) こうして琴が仲だちとなって、仲忠母子は兼雅(俊蔭女とちぎりを結んだ貴公子で、つまり仲忠の父に当る)とめぐり会うのである。仲忠の孝養譚は展開して、琴の秘曲の伝授とその霊妙な働きを語るところに移ったのである。

―― 終 ――